

それからまた内供は、絶えず人の鼻を気にしていた。池の尾の寺は、僧そうぐこうせつ供講説などのしばしば行われる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て続いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしている。従ってここへ出入する僧俗のたぐい類も甚だ多い。内供はこう云う人々の顔を根気よく物色した。一人でも自分のような鼻のある人間を見つけて、安心がしたかったからである。だから内供の眼には、紺の水すいかん干も白の帷かたびら子もはいらぬ。ましてこうじいろ柑子色の帽子や、しいにび椎鈍ころもの法衣などは、見慣れているだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに、ただ、鼻を見た。――しかしかぎばな鍵鼻はあっても、内供のような鼻は一つも見当らない。その見当らない事が度重なるに従って、内供の心は次第にまた不快になった。内供が人と話しながら、思わずぶらりと下っている鼻の先をつまんで見て、としがい年甲斐もなく顔を赤らめたのは、全くこの不快に動かされてのしよい所為である。

最後に、内供は、ないてんげてん内典外典の中に、自分と同じような鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようと思つた

事がある。けれども、<sup>もくれん</sup>目<sup>しやりほつ</sup>連や、舍利弗の鼻が長かったとは、

どの経文にも書いてない。勿論<sup>りゅうじゅ</sup>竜<sup>めみょう</sup>樹や馬鳴も、人並の鼻を

備えた菩薩である。内供は、<sup>しんたん</sup>震旦の話の<sup>ついで</sup>序に<sup>しょくかん</sup>蜀漢の

<sup>りゅうげんとく</sup>劉玄徳の耳が長かったと云う事を聞いた時に、それが鼻だっ

たら、どのくらい自分は心細くなくなるだろうと思った。

Read by Yumi Boutwell 12-20-07

Text from [http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/42\\_15228.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/42_15228.html)

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1997（平成9）年4月15日第14刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：平山誠、野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997年11月4日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫 \(http://www.aozora.gr.jp/\)](http://www.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。